

—特集 [患者さんの生活の質 (QOL) 向上を目指して！—自由診療を中心に (4)]—



大学病院での美容外科・美容後遺症外来の役割

朝日林太郎

日本医科大学形成外科

日本医科大学付属病院形成外科・再建外科・美容外科では、20年ほど前より美容外科・美容後遺症診療を行っています。現在では電車やテレビの広告などでも美容外科を目にする機会は多くあり、広く身近なものになっていますが、当院の美容外科・美容後遺症診療立ち上げの頃は、まだ美容外科が世の中に広く普及していない時代でした。美容外科は形成外科の一分野であるとともに、高度な形成外科の知識と技術が要求される分野でもあります。形成外科専門医を取得する過程においても、治療経験が期待される一分野でもあります。一方で、一部のトレーニングが不十分な医師による、医学的に明らかに不適切な治療が蔓延していた時代もありました。特に豊胸手術関連で不適切な治療による後遺症患者が多くおり、そうした患者さんを治療できる数少ない治療機関として、実績を上げてきました。

現在では医学の進歩とともに、美容外科学会や美容皮膚科学会など様々な学会が協力して美容医療診療指針などの策定もされており、科学的根拠のある治療を行う正当な美容医療が広がりつつありますが、いまだ不適切、不誠実な治療を提供する医療機関も少なからずあるのが現状です。そのような医療機関において治療を受けた挙げ句、行き場のなくなった患者さんの受け入れ先の1つとして機能することが、われわれの使命です。

また、美容後遺症診療のみならず、通常美容外科治療も行っています。ただ、われわれの大学病院において行う美容診療の役割というのは、通常美容クリニックの役割とはやや異なるものと考えています。ただリスクの低いシンプルな治療を行って売り上げをあげるのではなく、大学病院の強みであるマンパワー、充実した設備、侵襲の高い治療でも安全に治療を提供できる環境をできる限り活かして、通常の小規模な美容クリニックでは対応が難しいような治療を積極的に行っていくことが重要であると考えています。また、大学の美容外科を受診される患者さんは、いくつかの美容クリニックでの治療歴がある場合や、リク

エストがかなり複雑な患者さんが多い印象があります。そのような患者さんにも安全に高い水準の治療を提供することも、われわれの使命であると考えています。

美容後遺症外来は「マイナスからゼロ」ではなく、「マイナスからプラス」をめざしていく

病的なマイナスの状態を限りなく正常に近い状態にしていくのが形成外科診療です。これに対して美容外科診療は、もともと病気がないゼロの状態からプラスの方向へ、より患者さんが求める形にしていきます。そして、美容外科によってプラスの状態を求めたのかえってマイナスの状態になってしまったのが美容後遺症の患者さんですが、ここからゼロに戻すことは、美容後遺症診療としては最低限達成すべき目標であり、美容外科医としては、さらに患者さんがもともとめざしていたプラスを実現するようにしていきます(図1)。例えば、不適切な豊胸剤による後遺症のある方は、豊胸剤を除去するのみを行うと、もともと希望された胸の状態とはかけ離れた状態になります。これをいかに安全に希望した状態に近いところまで治療できるかが、美容後遺症診療に求められているものだと思います。

美容後遺症診療は、患者さんそれぞれで経過や状態が異なるため、どのような治療が正解であるか、治療のゴールをどこに設定するかを、患者さんそれぞれに対して考える必要があります。また、美容後遺症診療はすべて保険適用外の自費診療になるため、コスト面も考慮して、治療方針を立てる必要があります。患者さんの多くは美容外科治療ですでに高額な医療費を支払っており、そのうえ全額自費となる美容後遺症診療の費用負担は厳しい場合がほとんどです。これらの問題をクリアすることは非常に難しく、経験を要しますが、治療戦略を立てていく上で、美容外科での経験はもちろん、形成外科における外傷治療や再生医療などの知識と経験が、非常に役立っています。美容外科はあくまでも、体表を扱う外科である形成外科の一分野

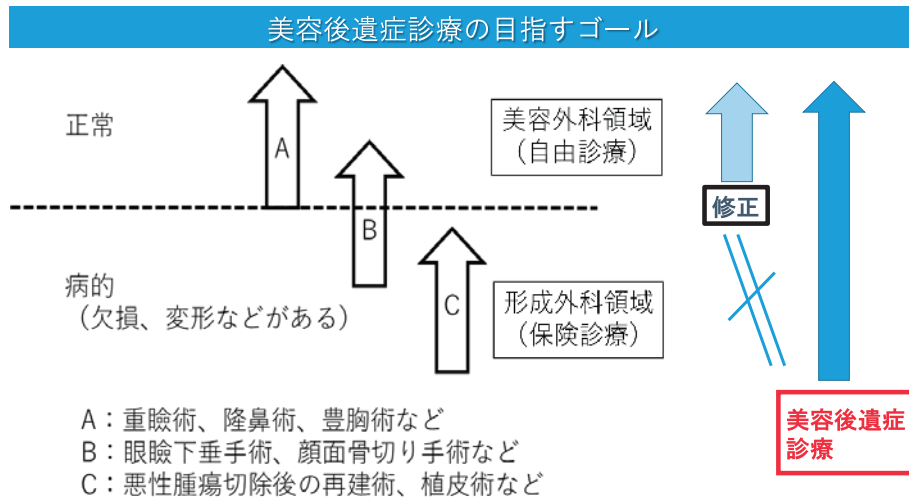


図1

であるという認識を再度実感する機会が多くあります。

様々な問題をうまく解決して、マイナスからプラスを実現できた場合には、患者さんの人生を劇的に良い方向に好転させることができたと実感することができ、やりがいを感じます。

美容後遺症に対する実際の治療例

美容後遺症に関しては、原因も症状も患者さんによって様々ですが、特に当科で相談を受ける機会が多いのが、「非吸収性充填剤」による注入治療後の後遺症と、シワ弛みに対する成長因子注射による後遺症です。

非吸収性充填剤による豊胸は以前から問題になっており、日本美容外科学会をはじめ関連学会から「強く推奨しない治療」として注意喚起はされていますが、法的には特に規制されていません。現在も一部医療機関においては治療が提供されており、これによる合併症・後遺症は多く報告されています。炎症や感染はしばしば妊娠・出産のタイミングで現れてきます。より豊かな生活のために受けた施術で、妊娠・出産という最も幸せな時期に大きな影を落とすこととなります。今は無症状でも、いつトラブルが起きるのかと不安になって外来を受診されるケースもあります。図の症例は32歳の女性で、非吸収性充填剤による豊胸治療後の患者さんです。吸引カニューレなどを用いて皮下の異物はきれいに除去することができました(図2)。ただ、このように完全除去に至るケースは少なく、筋体内などに浸潤した異物が残り、術後炎症や感染を生じるケースもあります。非吸収性充填剤の除去治療はきわめて難しく、根気を要します。

また、血液中の成分である多血小板血漿

(Platelet-rich plasma: PRP) に成長因子(Basic fibroblast growth factor: bFGF)を混ぜて注射するシワの治療に関しても、美容医療診療指針という美容診療におけるガイドライン上ではきわめてリスクの高い治療避治療という位置づけにありますが、この治療による「しこり」や「ふくらみ」の相談を多く受けます。これらの治療においては、外科的に治療を行う場合は傷痕が目立たない箇所からアプローチして除去する必要があります。症例はprp+bFGF治療後の左頬の硬結に対して、フェイスリフト手術とともに異物除去を行いました(図3)。左頬のしこりは除去され膨らみは改善しており、同時に行ったフェイスリフト手術によりフェイスラインもすっきりとした変化が出ています。

また、注入剤とは少し異なりますが、オステオポールという人工物を鼻先に入れる安易な鼻整形手術後のトラブルも多くみられます。鼻先は皮膚の血流が乏しく、かつ柔らかい軟骨で形が構成されている部位のため、人工物により軟骨や皮膚の構造が破壊される場合があります。このような場合、安全に人工物を除去すると同時に、破壊された軟骨組織の修復と、人工物除去により損なった組織のボリュームや高さを補うような治療が必要になります。

これらのケースに共通していることは、安全に異物の除去や機能的な改善を達成することはもちろんなのですが、いかに健常な状態に戻しつつ、より整容的に良い状態にしていくかを念頭に治療はすすめています。豊胸後のトラブルにおいては、いかに安全に元よりも形の良いバストを形成していくか、シワや弛みのトラブルにおいては、しこりや膨らみを安全に除去しつついかにシワ弛みも改善させるか、オステオポール

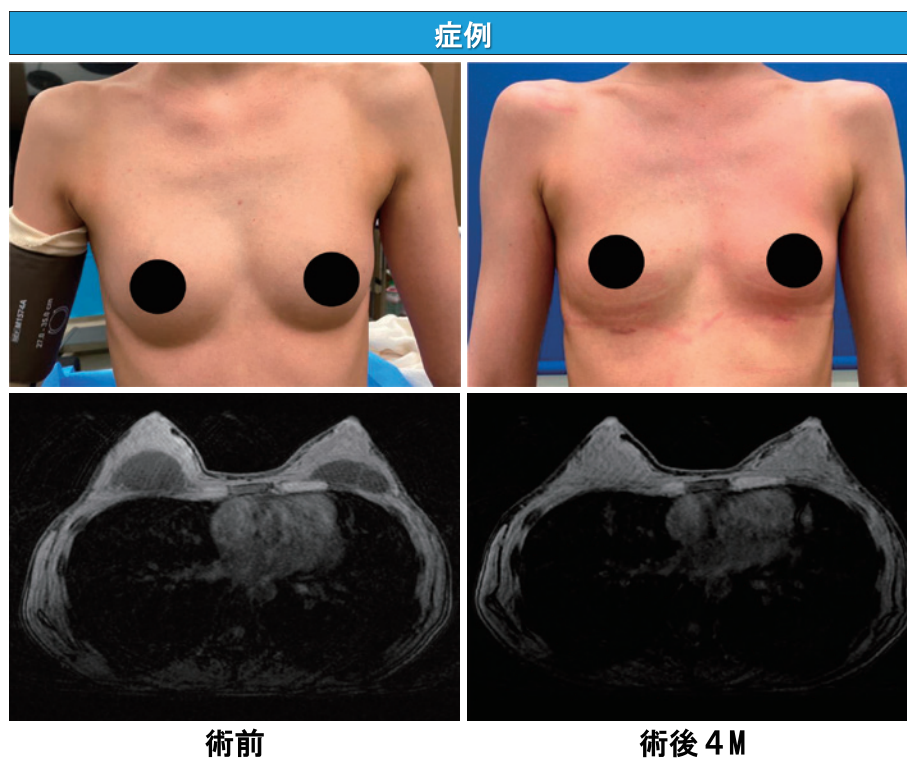


図 2

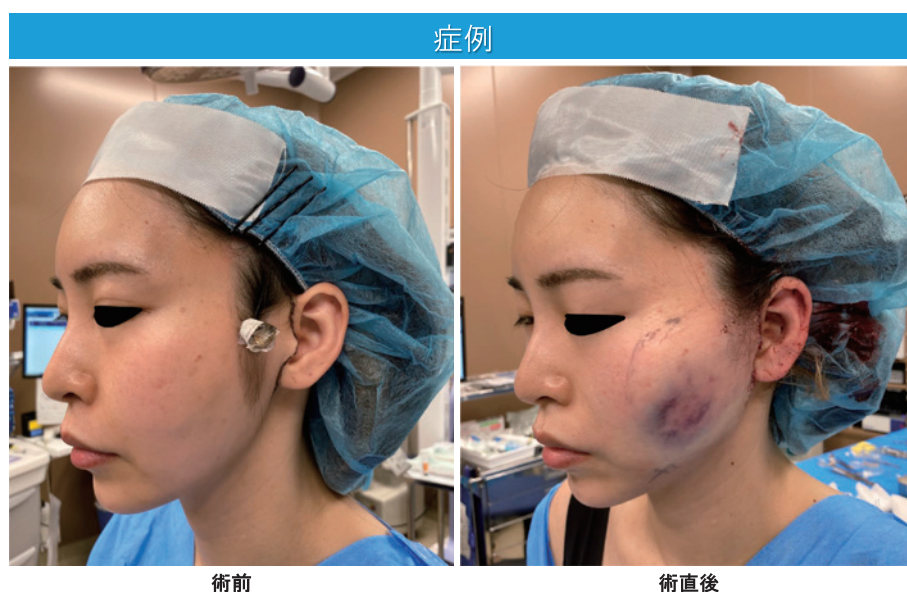


図 3

挿入後に関しては、安全に人工物を除去しつつ、いかに自家組織で除去した分の高さを補うか、といったところです。

いままでの成果

2020年4月から日本医科大学附属病院の美容外科・

美容後遺症診療を担当しています。まだ3年と半年程度ですが、特にX (旧 Twitter) などのSNSを通じて、主に美容後遺症についての情報発信を行っていったところ、初診患者さんの数は年々倍増しています。それに伴い治療実績も増えていき、日本美容外科学会や日本形成外科学会をはじめ、多くの学会や学術論文

で成果を発表して実績をあげることができました。しかしあくまでも情報発信や学術活動の最終的な目標は、当院の外来患者が増えることよりも、美容手術を今後考えている人や医療機関への働きかけにより、美容外科の透明性・安全性を向上させることを通じて、美容後遺症患者の数そのものを減らしていくことにあります。

自分自身も美容外科診療に携わっておりますので、あらゆる手術にもリスクが伴うことは十分理解しています。また、そのようなリスクは、手術の難易度や侵襲にかかわらず、簡単な手術でも偶発的に生じる場合があります。偶発的に生じてしまう合併症、後遺症に関しては、ゼロにするのは難しいと思います。しかし、当院に受診される患者さんをみていると、偶発的に生じたというよりは、明らかに不適切な治療や、学会などで注意喚起されている医療材料の使用などによる、必然的に生じた美容後遺症による患者さんがほとんどです。このような患者さんに関しては、美容診療を受ける患者さん、美容診療を提供するクリニック側、双方への働きかけにより、少なくできるのではないかと思います。

今後の展望

日本医科大学形成外科・再建外科・美容外科は、美容外科や美容外科後遺症の診療や教育を行うことができる日本でも数少ない施設です。また、診療科長である小川令先生をはじめとして、臨床にも研究にも精通した一流の形成外科医の意見やアドバイスを伺いながら診療をすすめることができる素晴らしい環境があります。今後はこの素晴らしい環境を活かしながら、自分自身の診療レベルを向上させていくことはもちろんですが、美容外科の知識がある形成外科医、形成外科のベースがある美容外科医を一人でも多く輩出することも、自分の重要な役割であると思います。

大学によっては、美容外科診療を全く行わない形成

外科学教室も少なくありません。これは僕個人としては非常にもったいないと考えます。美容外科診療の経験は、形成外科診療でも多く役に立ちますし、その逆もあります。形成外科関連の学会で、美容外科診療で得られた知識を応用した治療を発表していくことで、形成外科診療と美容外科診療の親和性を、より多くの医師にも伝えていけたらよいなと思います。

患者さんへのSNSやテレビ特集などを通じた情報発信に関しても今後も継続的に行っていきたいと考えています。特に美容後遺症に関する発信に関しては、患者さんの個人情報やプライバシーに関してはもちろんですが、治療を受けた患者さんが不用意に不安を助長させるようなことがないようにすることなどにも留意する必要があります。しかし、実際の美容医療を受けて後遺症を患った患者さんと日々向き合う自分だからこそ伝えられることもたくさんあると思いますし、多くの人にとってプラスになるような発信を続けていければと考えています。

今後も当科は美容後遺症におきましてもプライマリーの美容診療におきましても、一層精力的に取り組んでまいります。お力になれそうな患者さんがおられましたら、いつでも当科外来へご紹介いただければ幸いです。

Conflict of Interest：開示すべき利益相反はなし。

(受付：2023年10月20日)

(受理：2023年11月7日)

日本医科大学医学会雑誌は、本論文に対して、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY NC ND) ライセンス (<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>) を採用した。ライセンス採用後も、すべての論文の著作権については、日本医科大学医学会が保持するものとする。ライセンスが付与された論文については、非営利目的で、元の論文のクレジットを表示することを条件に、すべての者が、ダウンロード、二次使用、複製、再印刷、頒布を行うことができる。